

2025年度 冬号 Start Line

図書部&進路指導部からの進路情報を発信します。冬号は、節目を迎え、新しい一歩を踏み出す時に読んでほしい本を特集しました。苦しい時や、心が辛くなった時に、心の支えになればと思いながら、本を選びました。

『ある奴隷少女に起こった出来事』 ハリエット・アン ジェイコブズ 著 大和書房

19世紀アメリカで、ある黒人の奴隷少女が、自らの尊厳をかけて戦った実話です。「悲しみ」「絶望」「恐怖」日々苦難の連続の中で、決して諦めることなく、前を向いて生きてきた先にあった人生とは、どのようなものだったのか。

最初は、物語だと思われていたのですが、126年後に実話とわかり、米国でベストセラーとなり、日本でも話題となった本です。アメリカの歴史を知りたい人におすすめします。



『風のマジム』原田 マハ 著 講談社

朝ドラ『虎と翼』以来、“推し”の伊藤沙莉さん主演で2025年映画化され、本を読んで、そして映画を見て、二度感動するというお得な体験ができた作品です。

主人公の伊波まじむは派遣社員として働いています。社内ベンチャー募集の告知をみて、沖縄の名産品であるさとうきびでラム酒を造るという提案をしました。無謀にも思える事業ですが、まじむの熱い思いと家族や周りの人の支えが、沖縄に吹く風のように、まじむの背中を優しく押し、夢をかなえてゆくサクセスストーリーです。

沖縄南大東島グレイスラム社長金城祐子さんがモデルの実話に基づくお話です。台風が何度も通り過ぎ、強い風にさらされ、その中でも耐えて成長していく沖縄のさとうきびは、本当に甘くておいしいそうです。私たちの人生も同じですね。その時は、苦しくて最悪だと思っても、その逆境を乗り越えた時、強くなった新たな自分になっている。人生にとって、とても大事なことを教えてくれる素敵な作品でした。*「まじむ」とは沖縄の方言で“真心(まごころ)”という意味だそうです。

『スピノザの診察室』『エピクロス処方箋』 夏川草介 著 水鈴社

この2作品のテーマは、「医療:看取り」です。現役医師が描く内容には、いつもリアリティがあり、引き込まれてしまいます。死と向き合うという現実の厳しさを突きつけてくる内容ではありますが、京都名菓の描写が絶妙なバランスで織り込まれていて、泣いたり、笑顔になったりと、感情が揺さぶられる作品になっています。

大学病院で働いていた医師、雄町(おまち)哲郎は、妹の死をきっかけに、大学病院を辞め、町中の小病院で、外来、病棟、訪問診療など、多岐にわたる業務をこなしています。治せない病を抱えた患者やその家族に最後まで寄り添い、穏やかに日々を過ごすにはどうすればよいかを家族とともに模索します。人として自分に何ができるのか、悩みながら、治療にあたる哲郎の姿は、作者であり、医師である夏川さんと同じなのだろうと思いました。

夏川さんの医療がテーマの他の作品には「神様のカルテ」シリーズがあります。とても素敵な作品なので、併せて読んでほしいです。



沖縄産初のアグリコールラム
グレイスラム社のコルコル



『運命を変えるチャンスはなぜか突然やってくる』 今村翔悟 著 岩波書店

今村翔吾さんの作品を読んだことがあります。『塞王の盾』で直木賞を受賞し、現在 Netflix で配信されている岡田准一さん主演『イクサガミ』の原作も、今村さんの作品です。順風満帆な作家人生のようにも思えますが、夢をあきらめてしまっていた時期もありました。そんな彼が作家になれたのは、チャンスがやって来た時に、一歩踏み出す勇気を持ち、行動に移すことができたからだそうです。作家として生きていけるようになったこれまでの人生を振り返ることで、未来を担うみなさんが、夢を実現するために何が必要かを考えるきっかけになってほしいというメッセージが、この本には込められています。

今村さんには、夢があります。それは「本の世界を元気にする」ことです。直木賞受賞の時には、本を売ってくれた本屋さんに感謝の気持ちを伝えるために、全国の本屋さんに出向いて、サイン会を開いたりしました。書店経営が困難で、閉店に追い込まれてしまった地方の書店を引継いで、自分で経営したりしています。また新人作家発掘と地域再生のお手つだいもしておられます。「本の世界を元気にする」ためのアイデアが、どんどん湧いてくるそうです。この本を読むと、元気をもらえます。前向きな気持ちになれない人、夢を持ってない人、心が疲れている人、ぜひ手に取ってみてください。



直木賞受賞作
『塞王の盾』



Netflix で配信されている岡田准一さん主演『イクサガミ』の原作本